

## 地域



武蔵小金井「みんなで哲学  
なんでもてつがく」  
(2015.10.5)



X'masカップリングパーティー  
in 上天草 (2013.12.7)



# みんなで哲学 なんでもてつがく

中川 知美

「みんなで哲学 なんでもてつがく」ができあがるまで

私が初めて「哲学対話」にふれたのは、UTCP が主催する「学校をめぐる哲学対話」に参加した時のことでした。

その時は、自分の中でモヤモヤとやりたいことがあり、それが一体何というもので、どういう形のものなのか、分からずにいました。ただ、「哲学対話」の力を借りて、地域の人たちの居場所づくりがしたいと思っていたのです。

そもその起こりは、私が小学生の頃から漠然と感じていた、ある思いです。私が日常的にげなく「なんでだろう？」と思ったこと、親や友達に話すと「どうしたの？」と一笑されてしまうような「くだらない」ことについて、改めて話すと何となく気恥ずかしいけれど、誰かにしっかりと受け止めてもらいたいと思っていました。誰かに真剣に私の話を聞いてもらい、そして誰かの意見を聞いてみたい。そのモヤモヤとした気持ちは、日記という形で表出しましたが、誰かに話せる機会があったならば、自分の心も満たされていたのかもしれない。

そんな思いもいつの間にか忘れ、大人になり、「ちいさな哲学者たち」を映画館で観る機会がありました。愛や死について、真剣に話し合う子供たちを目の当たりにしたとき、私もこんな居場所を作りたい、という思いがふつふつと湧き上がってきたのです。そこで、哲学対話の活動をしている UTCP の存在を見つけ、ちょうど開催される予定だった、UTCP 主催の「学校をめぐる哲学対話」に参加することにしました。哲学対話の取り組みについて、学校の先生たちが熱い議論を交わしているのを目の当たりにし、衝撃を受けました。授業に取り入れるために、あらゆる試みがなされている様子を知り、小学生の私がそんな授業に参加することができたならば、どんなに幸せだっただろうかと思いました。

そこで、思い切ってお話しをさせていただいたのが、UTCP の梶谷真司さんでした。梶谷さんは、私のほんやりとしたお話にじっくりと耳を傾けてくださり、次から次に面白いアイデアをたくさん出してくださいました。新参者で部外者の私に、いったいどんな反応が返ってくるのだろう、もしかしたら断られるのでは、と不安に思っていました。そんな不安も一瞬にして吹き飛ばぶくらいの梶谷さんのパワーに、すっかり魅了されてしまいました。そうして出来上がったのが、「みんなで哲学 なんでもてつがく」です。

「みんなで哲学 なんでもてつがく」は、地域の誰でも参加できて、どんなことも話せる「居場所」です。この名前は、「哲学対話とは、疑問を持ってみんなで考える場。みんなに哲学者になってほしい」という梶谷さんの言葉によりつけられました。

「みんなで哲学 なんでもてつがく」のはじまり

## 第1回「絵本でてつがく」

絵本を使って哲学対話をしよう、というテーマです。絵本なら子供も入りやすいのではないかと、ということで最初のテーマに選びました。参加者は大人10名、未就学児7名の計17名。助っ人で梶谷さんと小村優太さんが来てくださいました。「ファシリテーター」という難しい名前はやめよう、という梶谷さんからのご提案により、可愛らしく「助っ人」と呼ぶことになったのです。

事前に5冊の絵本を用意していたものの、当日ちょっとしたハプニングがありました。梶谷さんの、「絵本は小さくて見えにくいから、（開催場所の階下にある図書館で）紙芝居を借りよう！」という一声により、絵本から紙芝居に変わったのです。テーマは「絵本でてつがく」なのに、それだと「紙芝居でてつがく」だ、と言いたかったところをぐとこらえ、慌てて紙芝居を数冊借りにいきました。小さなことは気にしない、とおおらかな気持ちにさせてくれるのが梶谷さん流です。このおおらかなお人柄は、哲学対話の場面でも存分に発揮され、和やかな雰囲気に対話を進めることができました。

さて、今回集まった参加者は、哲学対話を経験したことがない人ばかりです。まずは自己紹介がてらコミュニティボール作りをしました。自己紹介といっても、名前も職業も話しません。名前は呼んでほしい名前で、話すことは「なにをしている時が一番楽しいか?」。気負いや緊張感もなくスタートでき、一気に距離感が近づいたような新鮮な感覚でした。

対話は、流れも複雑で入り乱れていましたが、そのなかでも少しずつ、確実に深まっていくという印象でした。なにより嬉しかったのは、誰もがいま起こっている対話を大事にしていって、それぞれの話に真剣に耳を傾けている、という真摯な雰囲気でした。私はこんな居場所を作りたかったのだ、と心が満たされていくのを感じました。

ところで、参加してくれた子供たちは、対話が始まるころには周りで遊び始めてしまいました。子供を巻き込んだ哲学対話については、課題が残りました。

## 第2回「子どもによる子育て相談室」

子育ての悩みを子供にも聞いてもらおう、というテーマです。子育てについて対話をしたい、という提案をしたのは私の方でした。0歳の赤ちゃんを持つ母である私は、1日中子供と接していて、大人とじっくり話す機会が減っていました。子育て中のお母さんにこそ哲学対話にふれてほしい、という思いから、このテーマになりました。参加者は、大人5名、高校生1名、未就学児2名の計8名です。助っ人に梶谷さん、神戸和佳子さんが来てくださいました。

ところで、今回の講座では、0歳～2歳の赤ちゃんの保育をつけるかどうかについては、梶谷さんと意見が分かれました。梶谷さんは、赤ちゃんも参加することで対話の雰囲気も変わって面白いのではないかと、ということでしたが、私は、育児中の母親が哲学対話に没頭するためには、安心して預けられる環境が整っていた方が良くはないか、という思いがあり、今回は保育をつけることになりました。ただ、せっかくなので、哲学対話をしている場所に保育スペースを設けて、子供の声を聴きながら哲学対話をしよう、ということになりました。子供たちが遊んでいるなかで子育ての話をする、というのが上手く作用していたと思います。子供も祖父母世代も単身者も、いろいろな立場の人たちが子育てについて話すことによって、普段自分が考えもつかないような視点を持つことができました。そしてもうひとつ、印象深かったことがありました。10代の親子で参加してくださった方がいました。子育てがテーマなだけに、普段親子では話さないような悩みを双方が話してくれました。親子だけだと喧嘩になるであろうことを、慎重に言葉を選んで話しているのが分かりました。最終的に悩みは解決されたわけではないけれど、梶谷さんの次の言葉がすっと腑に落ちました。『『悩む』と『考える』は違う。『悩む』のではなく、『考える』こと。考えれば考えるほど、悩まなくてすむ』。

みんなの「悩み」をみんなで哲学する場、「みんなで哲学 なんでもてつがく」の意義をあらためて感じることができました。

## 第3回「商店街へ行こう」

商店街へ出向き、お題に合うものを写真に撮る、というアクティブな哲学対話です。参加者は大人7名、未就学児5名の計12名。助っ人は、梶谷さん、神戸さん、小村さんです。

お題は、「ありふれているけどめずらしいもの」「きたないように見えるけどきれいなもの」「見えないけど確かにあるもの」でした。3回目ともなると、梶谷さんの無茶ぶりにも、参加者は楽しんでいる様子でした。「いまから30分後に集

合してください、解散！」という掛け声とともに、参加者は散り散りに商店街へ吸い込まれていきました。商店街には、たくさんの哲学者がいました。地面に座り込む哲学者もいれば、路地裏の自転車をじっと見つめる哲学者も。街の人が不思議そうに覗き込んでいます。「お題を持つことによって、街を歩いていても見るものが変わる。普段見ないものを見るようになる。視点を変えると、見えるものがある。なんでもないものが面白く見える。」梶谷さんの思惑が成功しているようです。参加者が撮ってきた写真はどれも趣向を凝らしていて、面白いものばかりでした。今回ばかりは、子供たちも写真を撮って、発見したことを話してくれて、楽しんでいるようでした。

3回とも異なるテーマでしたが、どれも濃密で、私にとってはかけがえのない時間であり、生きる糧となる哲学対話でした。

これからも、様々な場所で、さまざまな人たちと「みんなで哲学 なんでもてつがく」を繰り広げていきたいと思っています。

\* 以上3回の「みんなで哲学 なんでもてつがく」の詳しい様子は、こちらをご覧ください。

→<http://minnadetetsugaku.blogspot.jp/>

## どこでもない、ここで～私の街の哲学カフェ

尾崎 絢子

私が哲学対話と出会ってから、2年ほどが経とうとしています。「はなこ哲学カフェ」を始めてからは1年が過ぎました。何だかこの2年間は大きな波に流されて自分でも全く想像しなかった場所に辿り着いた、そんな感覚を覚えています。

私はただの「主婦」です。サラリーマンの夫と2人の子ども、ちょっぴり仕事もしているけれど、毎日子どもと（たまに夫の）お弁当を作り、幼稚園への送迎、掃除に洗濯、公園でママ友と井戸端会議、魔の黄昏時からは泣き続ける赤ちゃんと赤ちゃん返りをしている大きな赤ちゃん（長女）を抱っこしながら夕食作り、食べたらお風呂に寝かしつけ。あー、今日も寝落ちしちゃった！！と朝を迎えるごく一般的な主婦です。「いつどこで、哲学カフェを知ったの？」とよく聞かれるのですが、実はよく覚えていません。子どもの仕事をしていることから、価値観を覆される経験が多く、考えることが好きでした。自然に引き寄せられていった、そんな気がします。

「哲学カフェ」の存在を知った私は、あっという間に惚れ込み、夢中になってしまいました。しかし、哲学カフェの開催は大体が小さな子どもを持つ主婦にとっては厳しい時間帯。沢山のハードルを越えていかなければなりません。平日の昼間にないかな。電車も乗らないで行けるといいけど。子ども連れで行ければ友達も誘えるな。そんな哲学カフェ、私の街にあればいいな。そんな思いから「はなこ哲学カフェ」は生まれました。

興味を持ってもらえた友達数人に声を掛け、月1回の開催を目指しスタート。しかし、あっという間に壁にぶつかります。「哲学」の「て」も知らずファシリテーションの知識も技術もないので当然ですが、進行するということがどういふことか分からなくなってしまったのです。そんな中、出会ったのが「P4E研究会」でした。

FBで「P4E研究会、ファシリテーションの練習」というイベントページを見つけた時の衝撃は忘れられません。「これだ！ これに行かなくては！」まさしく私にとって救世主のような存在でした。今思えば、清水の舞台から飛び降りるとはまさにこのことだったと思います。一生足を踏み入れることなんてないと思っていた東大に、たった一人で乗り込んだ(?)のですから。しかし、いざ行ってみると待っていたのはふんわりとした優しい雰囲気と笑顔の参加者、先生方。難しい哲学研究をする会ではなかったのです！

「哲学をすべての人に」の名の通り、P4E 研究会はとても開かれた場所です。「対話を始めた途端、しーんとなってしまふんです……」「対話の途中で行き詰まると、話をする人がいなくなり、コミュニティボールがぼつんと真真中に置かれてしまいます……」など、なんとも悲しい相談から「何をしたら哲学的になれるのですか?」というちょっとオカシイ質問まで、実に丁寧に答えていただき、また一緒に考えてくださいました。

特に大きな経験となったのは、地域のママサークルから「哲学カフェをやりたい」という声を頂き、コラボ企画を開催した時です。研究会で、哲学対話の予行練習とファシリテーションの検討をする機会をいただきました。具体的な技法や進行方法はもちろん、特に心に残っているのは「進行は評価されるものではなく参加者1人1人が考えることが大切である」「そのために責任を持って参加してほしいと伝えて良い」「進行が自分の不安さを素直に伝えてもよい」ということでした。

検討会でのアドバイスのもと「私は何も出来ません!」と声高らかに宣言したことにより、参加者1人1人が考え、積極的に問い、言葉を紡いでいく、とても暖かで和やかな対話の場となったように思います。「それはどうして?」と問いかけられ「改めて考えたことなかった。どうしてだろう?」と、ふと立ち止まって考える。そんな風景を何度となく見るようになりました。小さな子ども達も参加したこの会、危険がない限りは対話に意識を向けることをOKの場にするのを共有していたのですが、そこはさすがやんちゃな子ども達です。見事に沢山の危険を冒してくれました。椅子から転げ落ちる、洋服ラックを倒して下敷きになる、部屋から逃走する、など対話がストップしてしまう場面が多々あり「やっぱり子どもがいない時にやりたいなあ〜」という声も上がりました。その反面、そんな喧噪の中でもぐっと対話に身を寄せて、一生懸命考えている姿を見ると、特に乳幼児を抱えるお母さん達にとって必要なのは「今」「ここで」出来る対話なのだ痛感させられるのです。哲学カフェは、誰でも参加出来る場です。「誰にでも開かれた場」を問うことはとても難しい問題だけれど、少なくともはなこ哲学カフェは「子どもがいても参加出来る場所」として、地域に存在していきたい。そんな風に思うのです。

今年の5月には、小平市の助成金を受けて哲学カフェのイベントも開催する事が出来ました。「イベントが面白かったから、他の哲学カフェにも行ってみたい」という声も聞くことが出来ました。こうして少しずつ、哲学カフェの存在が地域に知られていくのを肌で感じる事が出来るのは、とても嬉しいことだと思います。

はなこ哲学カフェの特徴として「お母さん」の他にもう一つ「子ども」という

ワードがあります。自分の子どもと哲学対話したいな、地域に子どもが哲学出来る場所があるといいな、そんな思いもあって P4E 研究会と NPO 法人子ども哲学おとな哲学アードコーダが主催・企画したイベント「こどものための哲学対話」に自分たちの子どもを連れて参加しました。映像や絵本、様々な媒体を通して答えのない問いに向き合う中で、ドキドキやワクワク、喜びや楽しさ、戸惑いや不安など、子ども達の様々な表情を見ることが出来、大人である私たちにとっても沢山の気付きや学びのある時間となりました。

「哲学対話」は「やらなければいけないこと」ではありません。興味がなければやらなくていい。でも、やがて子ども達が成長して、友達との関係に悩んだり社会の不条理さに苦しんだり、理不尽な出来事にぶち当たった時に「哲学対話」はきっと、あなたの進む道にヒントをくれる。あなたを悩みや苦しみから助けてくれるものは、友人だったり、有名な本の言葉だったり、あるいは心癒される音楽だったりするかもしれないけれど、「哲学対話」っていうお助けポケットもあるよ。ポケットは一つでも多い方がいいと思うんだ。だからこっそり傍に置いておくよ。たまには思い出してね。幼い我が子を見つめながら、そんな思いを巡らせています。今は大好きなお母さんを夢中にさせている、あなたのライバルかもしれないけれど、マヨネーズを塗ってもふにゃふにゃしないリングを見て（絵本「りんごかもしれない」のマネ）「なんでだろう……」と眉間にしわを寄せている表情を見ると、「今日、哲学カフェに行ってくる！」と自転車走らせる後姿を見送る日も、そう速くはないかもしれない、と思ったりもするのです。

少しずつ、本当に少しずつではあるけれど、でも確実に私の中で「哲学対話」へ思いが変化してきているのを感じています。出会ったばかりのころは、とにかく楽しかった。今も楽しいことには変わりはないのだけれど、今は悲しみや辛さが、ぽつりぽつりと浮かんで消えていく、そんな感覚も覚えるようになりました。私にとって楽しいばかりの対話は、どこか人任せで、誰かが何とかしてくれることを期待する、一方的なものだったように思います。それが少しずつ様々な角度から「哲学対話」を見ることが出来るようになってきたことで、色々な変化が起きてきている、ということなのかなあと思っています。それは「他人事」から「自分事」として対話に向き合い始めたということかもしれません。自分の発言に責任を持つ気持ちや、他の人の意見を分かってもらう気持ちが強くなる。好きなように話していただけれど（それは間違いではないのだけれど）、どうしたら伝わりやすいかを意識して、言葉を慎重に選んだりする。そんな自分の中の変化は、時に「なんであんなこと言っちゃったんだろう……」という後悔や、語彙力の少なさへの苛立ち、やっぱり分からないという悲しみや辛さなども一緒に連れてくるのだけれど、それでも一步一步、一緒に登山をするように足並みを揃え

ながら進んでいくと、ほんの少しだけれど、確実に素晴らしい景色が見えてくるそんな経験も与えてくれるのです。「哲学対話」への向き合い方は、誰も何も教えてくれません。自分の足で、カメよりさらに遅い歩みで一歩一歩進んでいく。2年でやっところかあー！とも思うけれど、次の扉の先には何が待ち受けているのだろう？と考えると進まずにはいられないのです。だからやっぱり哲学対話は面白い。

はなこ哲学カフェの今後の展望、なんてカッコいいものは描けないけれど、哲学対話の場がどこでもなく私の街にあり続けてくれたらいいなあと思います。きっとまた、少しずつ形を変えていくのだろうけど、楽しいと思うことを緩やかに続けていけたら、そう願っています。

## 世界が認めた日本の田舎・阿蘇の価値を 上げるための対話

大津 愛梨

国連の機関である FAO（世界食糧農業機構）が今世紀に入ってから始めた「世界農業遺産」は、小・中規模の家族経営農家とその土地独自の農業を続けてきた結果としてできた独特の文化や風景や生態系を次世代に遺そうという趣旨の制度である。「遺産」とつく割には未来志向で、どうすればそれぞれの土地の価値を維持できるかとどまらず、価値を上げていく取り組みの有無が認定審査の鍵となる。世界で 30 数か所の農山村が認定されているが、そのほとんどが行政主導によるもの。阿蘇は其中で唯一例外的に、民間人が認定活動を始めた場所である。「阿蘇は世界に誇る価値のある場所だ」と声を上げたのは、イタリアン料理のシェフだった。熊本らしい食材を追い求めているうちに、阿蘇にたくさん独自の食材があることに気づいたことがきっかけだったとのこと。その彼の呼びかけに県知事が応じ、官民一体となった活動が始まったのである。

2013 年 5 月。能登で開催された国際会議で、阿蘇は世界農業遺産の認定地域となった。関係者が喜ぶ中、地元住民、とくに農家の多くは意外なほど冷静だった。むしろ「遺産」という名前に抵抗があった人も多いと聞く。農業や開発が制限されるのではないかと危惧したのである。昔ながらの農法だけしかできなくなるのではないか。新しいことを始められなくなるのではないか。認定されても何の得にもならないどころか、害になることの方が多いのではないか。等々。保守的な土壌だからこそ守られてきた生活や文化があるのも事実だが、そういうコミュニティは変化や外圧に対して懐疑的であることが多い。そのような中、「地域の価値を見極め、それを高めていくのは自分たち自身の未来のためだ」という意識変革を促すために哲学対話をはじめた。

2014 年夏。阿蘇郡内の 4カ町村で、農家、行政職員、子育て中の母親、観光業者など多様な参加者による哲学対話ワークショップが行われた。「世界農業遺産」という名前からすると、農家にしか関連がないと思われがちだが、農村空間と言う意味においては、全ての住民が「当事者」となる。対話では身近な暮らしの中で感じる価値や課題について、幅広い意見が出てきた。問題はその後である。

「意見がたくさん出て良かったね」という自己満足で終わらせないためにも、フォローアップが必須だと考えた私たちは、若いスタッフが対話ワークショップ参加者を訪ね、感想や言い残したことなどを聞いて回った。対話のプロセスは非常に重要であることに疑いはない。しかしその場の「楽しかった」で終わらせてしまっては単なるワークショップに過ぎない。それなりに課題が見えて来ている場合は、このフォローアップが重要なのではないかと感じた次第である。

さて、哲学対話ワークショップに続く個別ヒアリングを経て出てきた意見の中から、地元での関心が高そうなテーマをピックアップし、外部講師を招いて勉強会を開催した。また、「実行」を伴うべきと思われるテーマについては、実行部隊を組んで補助金に申請して思いを形にする、という次のステップに移った。世界農業遺産に認定された後、それをどう生かしていくかについては行政やJAもそれなりに努力をしている。が、彼らが「世界農業遺産」というテーマから思いつくこと（予算をつけられること）とえば、認知度を高めるためのプロモーションと、農産物のブランド化、それにグリーンツーリズムの推進、という3分野しかない。それを批判するつもりは毛頭なく、それらの分野については彼らに任せ、この枠組みからは発想しにくいテーマについての勉強会やプロジェクトを選んだ。対話ワークショップをした年に手がけたテーマは、再生可能なエネルギーとクラウドファンディング（お金の話）、そして子育て、の3つ。以下、簡単にそれらの意義と中身について紹介したい。

農山村の人口が減って高齢化が進むのは日本全国どこでも同じ状況だし、その流れを簡単に変えることは不可能であろう。農業そのものも、TPPがどのように影響してくるか、正直言ってまだ実態が見えない状況にある。そのような中、「農村」という空間を構成している要素、つまり田畑や山や川や民家を健全に維持していくためには、農産物のブランド化だけでは限界がある。農山村の価値を高め、また生活空間としての機能を維持するためには、農山村にこそ豊富な自然資源を利用した再生可能なエネルギーを増やしていくことが大きな意味を持つであろう。これはもちろん地球温暖化防止の観点から語られるテーマであるが、農山村にとっては、地域から出て行っているお金を地域内にとどめ、さらに地域内に循環させながら地域の価値を維持ないしは上げていくための1つの鍵なのである。しかし、太陽光発電は景観上の課題もあるし、そもそも阿蘇地域の太陽光発電については買取りが制限されている状況にあるため、バイオマス（家畜糞尿や木や草）や小水力による発電や熱供給についての勉強会を開催した。講師となったのはデンマークのサムソー島という島のエネルギーを100%自然エネルギーに

変える取り組みの中心的人物であるソーレン・ハーマンセン氏。阿蘇郡の2か所で講演を行った。講演から1年たった今も、まだ実際に電気や熱の供給がはじまったわけではないが、自治体や農家など、多くの方に関心を持ってもらうきっかけとなったのは確かで、近い将来の事業化に向けて今も準備中である。

もう1つの勉強会は、お金に関するテーマ。「持続可能性」の中には、当然、お金の話がついてまわる。環境を良くする取り組みでも、無償のボランティアや有志だけでは持続性に欠けるからである。金利が非常に低い昨今、銀行に預けるよりも、応援する事業に対して出資をする「クラウドファンディング」の利用者が急増している。阿蘇の場合、この風景や文化や環境を活かし、それらを次世代に遺すための事業ということであれば、より広範な層から出資が募れる可能性を持っていると考え、哲学対話の時に何人かの若い参加者からキーワードとして挙がっていた「事業化」「雇用の創出」などの課題に対するヒントとなるような勉強会を企画した。講師は、ミュージックセキュリティーズというクラウドファンディング会社の方。事業主に代わって出資を募ったり出資者への配当を出したりする会社で、これまで知らなかったお金の集め方に、参加者は半信半疑ながら興味深そうに聞いていた。

これら2つの勉強会に加え、阿蘇に移住してきた若いお母さんたちが「子育て情報が欲しい」という意見があがったため、数名のママさんたちが実行部隊となって子育て情報誌を作成した。地方への移住が増え続ける中、特に3・11以降は家族連れの移住者が目立つ。特に縁故関係がなく移住して来られる方にとっては、お子さんの保育園や小学校、病院などの場所や特色を踏まえて移住先を決める、または移住してから情報を集める、といった状況にあり、作成してみると大きな反響があった。予算の都合で、阿蘇郡の1部のエリアに関する情報しかまとめることができなかったが、それが呼び水となって行政として取り組む可能性も出てきているところだ。阿蘇が世界から価値を認められた農村地帯だとしても、そこで育つ子供たちがいないことには引き継いでいく相手がいない。子供にとって自然の豊かな農山村はすばらしい環境だが、学校や病院のことを考えると、必ずしも子育てしやすい場所とは言えない。今後は、「田舎こそ子育てしやすい」社会になって欲しいと願っているし、阿蘇がそのトップランナーになっていければ本望である。

以上、哲学対話ワークショップが開かれた経緯と、開催後にみられた展開についての紹介だった。地方を変えるのは「若者、よそ者、ばか者」と言われてい

るが、哲学対話によってそれらに該当する面々の「ここでこんなことをやりたい！」という思いが引き出せたことが、何よりの成果だったように思う。町づくりのプロセスには終わりが無い。きっかけづくりの対話だけでなく、今後壁にぶつかった時や、次のステップに移行する時など、要所要所で哲学対話を取り入れることができれば、と考えている。そしてこの手法が、多くの農山村にとって有効な手法となるよう、微力ながら貢献していけたらと願ってやまない。

# 「地域」から逆照射される「都会」のあり方

～ 熊本県阿蘇地方での哲学対話から

江口 建

私たちの普段の暮らしにおいて、「安心して対話ができる」空間というのは、じつはそれほど多くない。

職場での会話はむろんのこと、友達同士や恋人同士、親子、夫婦の会話でさえ、ときに相手の顔色を窺い、気を遣い、遠慮し、ホンネを隠し、すれ違いにイライラしながらも、「よい関係」を保とうとする。学校、家庭、職場——いたるところに「我慢」と「抑圧」の構造が見られる。

そのような中、安心して対話のできる空間を作ってゆこう、という取り組みが、「P4E」である。P4Eには、一定の方法論とルールがあるが、なかでも対話においてとても重要なP4Eのモットーが、「安心感 (safety)」の創出である。哲学対話では、原則として、「これを言ってはダメ」というのは、ない。何を言ってもよい。本音で話す。ただし、絶対に破ってはいけないルールがある。それは、他人を誹謗中傷したり、揶揄したり、侮蔑したりしない、ということ、対等の立場で話をする、ということ、そして、誰も発言を強制されない、ということである。

そのような「哲学対話」を携えて、私たちは、2014年7月、熊本県阿蘇地方を訪れた。東京大学UTCPの現センター長・梶谷真司教授をファシリテーターとして、もう一人のスタッフと共に、オブザーバーとして同行した。

私たちが訪れたのは、南小国町(7/18、南小国自然休養村管理センター)、産山村(7/19、産山村役場)、南阿蘇村(7/19、南阿蘇村役場 白水庁舎)、高森町(7/20、南阿蘇ビジターセンター)の四ヵ所である。今回の対話企画は、南阿蘇で中心的な役割を果たしている大津愛梨さんの声かけによって成立したものである。愛梨さんは、ドイツ生まれの東京育ち。ドイツの大学院で学んだあと、旦那さんの地元である熊本へ移住し、それ以来、「農家が食べ物もエネルギーもつくる社会」を目指して、約11年間にわたって精力的な活動を続けている農業者である。何を隠そう、彼女は、イタリアの国連食糧機関が主催した会議で、英語でプレゼンをし、阿蘇を「世界農業遺産」登録に導いた立役者の1人でもある。

今回の対話のメインテーマは、阿蘇地域が「世界農業遺産」に認定されて一年が経過した時点で、改めて自分たちの価値を見つめ直し、今後の展望について考えてみよう、というものであった。コンセプトは、「改めて話し合いの場を持つ」ということだが、これがまた口で言うほど簡単なことでもない。市民社会が

どれだけ成熟しているかは、ひとえに（議会とは別の形の）討議による意見形成と意思決定の場がどれだけ確保されているにかかってくる。愛梨さん自身、今こそ第三者の介在による中立的な場の設定が必要だ、と切実に感じていたようである。当事者同士だと言にくいことでも、第三者がいることで言える場合もある。加えて、外の人に向かって説明する訓練にもなる。内輪だけでなく、外部の人にも解かる言葉で説明できなければ、外から人を呼び込むことは難しい。「言語化」の重要性ということでは、「哲学」の出番である。

初日の最初に、ウォーミングアップとして、「南小国の好きなどころ、自慢できるところは？」といった話し合いをしたあと、「世界農業遺産について今なにを思うか」というテーマで意見交換を開始した。翌日以降も、それぞれの場所で、同様の手順で対話を進めていった。以下、全体を通して、印象に残ったフレーズを挙げながら、対話を振り返ってみたい。

### 「何もないこと」の良さ

対話の中で新鮮に感じたことのひとつが、「何もない」ということが決してネガティブには語られない、ということだった。これは、都会に暮らしては絶対に遭遇しない現象だ。南小国での対話で、ある住民の方がおっしゃっていた。「コンビニもない、ドラッグストアもない、何もないところに、なんでこんなに人が来るのか、常々疑問に思っていた」。産山村でも、次のような意見を伺った。「ここには何もない。何もないところが一番いい。精神的に圧迫されたサラリーマンを癒してくれる。暮らしていて気分的に楽というのは、精神的な財産」。

「利便性」と「快適さ」は、いつでも複雑な関係にある。近くに病院がない、コンビニがない、というのは、実用的な観点からすれば「不便」なはずだが、それを補ってなお余りある魅力が阿蘇地域にはあるとすれば、それは何なのか。「快適な暮らし」、「良い暮らし」とは何なのか。

産山村で伺った意見だが、「信号やコンビニなど、様々なものが『ない』からこそ、あれをしよう、これをしよう、と新しいアイデアが生まれてくる」。

都会で暮らしていると、とにかく情報が「雑多」である。あまりにもいろいろなものが多すぎて、自分が何をしたいのか、何をしているのか、本当に自分が望むものが何なのかを見失うことがある。いろいろなものが「ありすぎて」、自分の選択ですら、本当に自分の選択なのか分からなくなるのだ。

阿蘇での対話は、「何もないこと」の幸福、そして、「何もない」ところから自分たちで作り出す喜び、というものに想いを馳せる貴重な機会となった。

## 「人」と「家族」

阿蘇地域の好きなのところ、自慢できるところは何か、という問いかけに対して、どの地域でも、風景、溪谷、山、水、空気、温泉など、「自然」の側面は必ず挙がるのだが、それと同時に必ず出てくるのが、「人」である。皆、口をそろえて言うのが、「人がいい」、「人が温かい」。そこでは、いつでも「自然」と「人」がセットで語られていることに気付く。

それとあわせて、阿蘇滞在中にしばしば頭に浮かんだのが、「家」や「家族」という言葉である。そこには、家庭があり、子供たちがいて、歓待があった。

「地域」に足を運ぶたびに思い出される言葉がある。それは、「ローマ人の言葉では『生きる』ということと『人々の間にある』ということとは同義であった」というアレントの有名な指摘である。「人々の間にある」ことからもたらされる内省以前の根元的な結びつき、地域に特有の「人々と一緒にいること」の〈居心地のよさ〉、〈安心感〉はどこから来るのか、と自問する機会が何度もあった。そこで私が直感的に感じたことの一つは、以下のようなものだ。なぜ安心感があるのかというと、「顔」が見えるからだ。そこには「顔」がある。そこでは誰も抽象化されないし、匿名化もされない。どの人間も、非常に具体的な一個の人間として理解されうるような経験の場、それが「地域」にはある。

産山村では、「親の名前を出せば、すぐに誰かが分かるくらい、人付き合いが濃密で、全住民が身近な間柄」であるため、「地区でのまともりは素晴らしい」という話を聞いた。また、農業再生、地域復興をめぐる、すべての地域で問題になったのが、後継者問題、および「子育て世代」の巻き込みをどうするか、ということであるが、ここでは、人々の横のつながりだけでなく、現在から未来への時間軸に基づいた縦のつながりが考慮されている。その場合の「次世代」とは、「国の将来を担う若者」といったような抽象的なものではない。想定されているのは、非常に具体的な特定の個人、およびその関係者である。つまり、自分たちの子供である。顔の見える我が子である。自分の子供、孫、そして、そのお友達に、何を残してやりたいか。人々が考えているのは、そこである。

## 「カッコいい」農家

最終日、高森町で実施した対話では、議題についてアイデアを出し合ったあと、「魅力ある人やものとはなにか」というテーマで対話をおこなったのだが、その中で、「カッコいい農家」というフレーズが出た。「ダサイ」と思われがちな農業を「かっこよく」見せるには、どうしたらよいか、そして、農家は、その努力をもっとするべきではないのか、という意見である。具体的には、カッコいい

作業着を着たり、サングラスをかけたり、など。

「かっこよさ」とは何か、というのは、むしろ外見の見栄えの問題ではないが、絶えず人に見られている、見せている、という感覚は、往々にして「惰性」になりがちの日常にメリハリを与えてくれる。実際、仮面ライダーのようなスーツに、サングラスをかけ、颯爽とトラクターに乗っていたら、かっこいいではないか。なぜなら、そこには、そのような格好をするだけの使命感や志、夢が感じられるからだ。今の子供たちに必要なのは、じつは中途半端な道徳教育などではなく、「かっこいい大人」である。それを見て、みずから真似をしたい、と思わせるような、大人の背中である。子供は、かっこいいものに憧れる。師匠の腕前を見て、自分もこうなりたい、と思うのは、それがかっこいいからだ。電車の中で、お年寄りに席を譲るのは、その行為が、かっこいいと思えるからだ。

「かっこよさ」は、価値観の共有や共感性の指標において、確実に重要な要素になる——そのような密かな確信を私は得た。

## 終わりに

阿蘇に暮らす人々を見ていて感じたこと、それは、「世界農業遺産とは、ここに暮らす人たちのことだ!」、「世界農業遺産とは、私たちの普段の暮らしのことだ!」という誇りと自信、気概である。

思い返せば、私がP4Eの活動に本格的に関わったのは、この阿蘇地方への出張が最初であった。その後も、何度も地域に赴く機会があったか、そのたびに思うのは、地域再生・地域復興について考える、という目的でおこなったはずの企画が、じつはどれも、私自身のあり方、あるいは都市で暮らすことについて、改めて再考を迫るものであった、ということである。現地の人々の話を聴くたびに、問題は、地方ではなくむしろ都市にあるのではないか、と思えてくる。

南阿蘇村での対話で、強く心に残っているフレーズがある。

「南阿蘇にとって、世界農業遺産は『銀河鉄道999』のようなイメージ。どこにでも停まるわけではないその銀河鉄道が、数ある星の中から、いま南阿蘇に停車したところ。これからどこへ向かうか分からないし、村民全員が乗ることはないと思うが、それに乗ってこの地域がどこへ向かうかを話し合っている段階。せっかく停まってくれたこの機会を、このままにしておくか、それともこれに乗って宇宙に飛び出すか、それは私たち次第」。

私たちが、どれだけ銀河鉄道に同乗できたのかは分からない。片足を乗せただけかもしれないし、窓から覗いただけかもしれない。それでも、「哲学対話」というものをきっかけに、ほんの少しでも銀河鉄道が（阿蘇という停車場から）走り出すさまを目撃する機会を得ることができたとすれば、ありがたく思う。少な

くとも、「哲学対話」という銀河鉄道は、私の中で、あのときに走り出したのだから。



## 婚活イベントと哲学対話

梶谷 真司

2013年12月7日、上天草で一つのイベントが行われた——「愛を語ろう in 上天草 Xmas カップリングパーティー 2013」というタイトルで「今までにない新しい婚活」とうたっている。プログラムは第1部「グループトーク」、第2部「パーティー（フリートーク）」、第3部「告白タイム」とあって、一番下になぜか「共催 東京大学共生のための国際哲学研究センター（UTCP）」という謎の一行。不気味な企画である。婚活と哲学——どちらから見ても冗談みたいだ。

しかしここに至る経緯は、大真面目であり、結果的には趣旨から言ってもこれほど哲学対話のポテンシャルが発揮される場はないし、私にとってこれまででもっとも有意義な対話イベントであった。そう、これは冗談のようで本気の、軽薄なようで重厚な企画なのだ。ということでまずは経緯から説明しよう。

2013年、私は京都の総合地球環境学研究所の萌芽研究で「地域性と広域性の連関における環境問題～実生活への定位と哲学対話による共同研究」という奇妙なプロジェクトをもっていた。当時地球研にいた大学院時代の後輩、鞍田崇君から「一緒に何かやりましょう」という提案があって乗った話だった。地球研は環境問題に取り組む研究所であり、鞍田君の関心が都市と地方の関係にあり、私が哲学対話のプロジェクトをやっていたので、その三つを無理やり組み合わせたものだった。ただ、無理やりと言っても、何の目算もなかったわけではない。今日の環境問題は、原因と結果が遠く隔たっているのが特徴で、都市や先進国のしわ寄せが地方や途上国に環境破壊となって現れる。東京の電力を確保するために福島に原発を作ったり、都会のごみを処理するために、郊外にごみ処理場を作ったりする。また先進国で消費する紙や材木のために、開発途上国の森林が伐採される。こうして因果関係が遠く隔たっているために、誰がどの問題の当事者なのかほとんど見通すことができない。実生活の中でいかに遠く離れた問題を身近な、自分にも関わる問題として自覚できるか、そこに哲学対話が貢献できるのではないか——というのがプロジェクトの目論見であった。

このプロジェクトの無謀さと未熟さはさておくとして、とにかくどこか地方で何かできないかという漠然としたことを考えていた時、東大の社会人向け講座で講師をしていた関係で、熊本県庁の東京事務所のIさんと知り合った。この人がまた面白い人で、哲学対話の話聞いて、すぐに興味をもってくれた。彼は地方でまともな話し合いもなく、いろんなことが決まり、進んでいく現状を深く憂慮

していた。きちんと話し合いができるようにならないと、日本は変わらない。ダメになる。哲学対話にはそれができるのではないか——ということで、何か一緒にやりましょうという話に。そこで何か話し合うための具体的なテーマがないかということで、いろいろ模索していた。そしてある日、Iさんが上天草市と水俣市の市役所の東京事務所の人を連れて研究室にやってきた。

それぞれの町でどんな話し合いの場があるのか、どんな問題があるのか話していたのだが、今一つ決定打に欠ける。円卓会議のような集まりはあっても、いつものメンバーが来るだけ。もっと普通の人たちが来て話をする場が作れないか……2時間くらいアーダコーダと話をして、「一度もち帰って考えてみましょう」ということに。そのあと雑談で、私は駒場祭の哲学カフェの話をしていて。そして「地域の問題について話し合いませんか」と言っても、なかなか来ないでしょうね。もともと人が集まるところでやるのが一番いいんです」と私が言ったところ、上天草の市役所のOさんが「毎年12月に婚活パーティーをやっていますけど」と言ったのだ。「それだ!」と直感的に思った私は、婚活と哲学対話を組み合わせたらどうなるか、なぜ面白いのか、思いつくままにしゃべった。それを聞いていたOさんは、一晩で素晴らしい企画書を作った——「さあ、愛を語ろうIN上天草～東大教授によるあたらしい合コン」。過疎化の対策としての結婚。お見合いをするさい、男女が表面的な相性や損得を考えるのではなく、お互いの価値観や人間性を深く知り、理解し合うのに哲学対話が力を発揮する。そのために愛について語り合う——それがこの企画のコンセプトだった。

さっそくOさんが上天草市役所の担当者Kさんに企画書を送ったところ、電話がかかってきた。「年末の婚活パーティーの件でOから連絡があったのですが、よく分かりません」——当たり前だ。婚活なのになぜ哲学なのか。分かれと言うほうが無理だ。そこで趣旨を電話で詳しく説明した。でも釈然としない。そこで上天草まで出向いて説明をした。それで何となく分かってもらえた。でもKさんが課長に話すと、当然理解してもらえない。そこで彼を駒場祭に誘ったら、公務の出張として来て、3日間哲学対話を体験してくれた。それでうまくいくと確信してくれたのだろう。Kさんが課長に報告したところ、「君がやってみたいというならやれ」とゴーサインが出て、本格的に動き出し、細かいところまで詰めた。

私がこだわったのは2つ。普通の参加者以外に地元住民を入れること、もう一つは、服装を「休日に街に出かける時に着る程度のカジュアルなもの」にすること。これでイベントはさらに訳の分からないものになった。相手を探していない、適齢期ですらない人がなぜか参加している。それにお見合いパーティーなら男も女も精いっぱいオシャレをするものだ。しかし、いろんな立場の人がいたほ

うが哲学対話は絶対に盛り上がる。だからすでに結婚している人、まだ結婚とは無関係な人がいたほうがいい。また、おしゃれをするのは、自分を防御しようとする気持ちの表れで、素直に言いたいことを言える「安心感」とは相いれない。だから気軽にいられる服装がいい。かくして当日、地元住民として年配の夫婦や地元の新聞記者など、10人が参加。一般の参加者は男女12人ずつ、みんなカジュアルな服装で来てくれた。

当日は、「愛についてみんなで話し合いたい疑問を出してもらったあとに投票したところ、「愛するのと愛されるのとどちらが好きか?」「愛と恋の違いは?」「愛って何?」「愛があればお金はいらないか?」「友達以上恋人未満ってどこからどこまで?」という5つの問いが残った。その中からグループごとに問いを選んでもらって対話をする。何度かグループを入れ替え、そのつど違う問いで対話をしてもらった。

若い人が自分たちの恋愛観や価値観を語る一方で、年配の既婚者の人が結婚したあとに愛情がどう変わるのか話す。地元住民の女性の一人が早々に「実はバツイチなんです、……」と言ってくださったおかげで、参加者で同じ境遇の人が何人もいて、「私もそうなんです」とあっさりカミングアウト。おそらく普通の会話であれば、なかなか口にできないことを話せるのは、何を話してもいいという哲学対話の安心感のおかげだろう。そういう場では、一度別れた者だからこそ言える言葉は、バツが悪いものではなく、かえって聞く者の胸を打つ。そしてバツイチの当人まで魅力的に見えてくる。また二十歳そこそこの若い女性が「やっぱり男は収入が多くない」と言っていたのに対して、年配の人たちは「お金よりも大事なものがあるんだよ」と諭すモードになる。しかしなぜそんなにお金が大事なのかその女性に聞くと、幼いころお金がなくてどれほど大変だったかを語った。するとむしろお金の大切さについて考えることになった。

また別のグループでは、女性を誘って一緒に過ごした時、どういう場合だったら脈があるのかという質問をした男性がいた。これはまったく俗な問題だが、普通の飲み会では、真剣に話し合うことはないだろう。参加者の女性たちは、それぞれに違う意見を言ったが、どの人にもその人の価値観、もっともな理屈があって、そこにいたみんながお互いの意見に感心していた。こうして年齢も立場も違う人が一緒に輪になって話すことで、おのずと自分たちの考えの前提や偏りが分かり、物の見方が広がる。そして何より、いつの間にか率直に親密に話ができる。

続けて行われたパーティーでは、この手のイベントにありがちないろんなゲームはまったく必要なく、最初からみんな楽しそうに歓談していた。市役所の人によれば、例年であれば、話の輪の中に入れず、ポツンと一人で立っている人が何人もいるとのことだったが、今回はそういう人が一人もいなかった。

最後に意中の人の名前を3人ほど書いてもらい、両想いになった組み合わせがカップルとして成立する。結局2組しか、それも若いカップルしかできなかった。その点では際立った成果には結びつかなかった。しかし対話の時の参加者の生き生きとした表情は、いつもの対話イベントで見てきたのと同じだった。パーティーの雰囲気は最初から打ち解けていたのは、明らかに対話の効果だ。パーティーが終わった後、多くの参加者が残って、2次会に行くようだった。地元住民の人たちも、みんな口々に「面白かった、またやりたい」と言っておられたし、市役所の人たち、ボランティアで来ていた人たちも、哲学対話が他のいろんな場で活用できそうだと期待の言葉をくださった。

翌年の9月、阿蘇に行くことがあって、ついでに上天草に寄って市役所を訪ねた。そこで聞いた話では、例年では一部のかわいい女性、かっこいい男性に票が集中するのが、今回に関しては、それがかなり分散していたという。また当日はカップルにならなかった男女が、のちにデートをしていたという話も聞いた。哲学対話同様、時間がたってから効果が出てくるのだろう。いずれにせよ、婚活パーティーと哲学対話はきわめて相性がいい。これは事業として十分成立している。しかしそれ以上に重要なのは、哲学対話は、個人レベルでも集団レベルでも、相互理解や相互承認としっかり結びつき、人間関係や共同体を変える力をもっているということだ。それは、阿蘇で農家の人たちと哲学対話を行った時と同じだった。

かくして私は、婚活パーティーから2年たった現在も、そもそもの出発点となった地球研のプロジェクトを継続している——2014年のプロジェクト名は「ローカル・スタンダードによる地域社会再生の実践と風土論の再構築」、2015年は「ローカル・スタンダードとは何か～地域社会変革のためのインクルーシブ・アプローチの理論と実践」となっている。そこでは環境問題を人権問題として捉え、ローカルな価値をどのように掘り起こしていくか、地域社会のイニシアティブをいかにして強化していくか、そのためのコミュニティデザインの手法をどのように開発していくかを議論している。そして実際に様々な地域に入って活動をしている。そこで核になっているのは、広い意味での「対話」である——こんなことを並べたてても、支離滅裂な戯言にしか聞こえないかもしれない。しかし、この婚活パーティーが、こうした社会変革のためのプロジェクトの大きな弾みになったのは確かなのである。

# 大学生の地域活動における 哲学対話の応用と展開

榊原健太郎

哲学対話をイベントや活動に応用したり活用したりする取り組みは様々にあると思いますが、そうした取り組みの一つに大学生が活動主体となって展開する地域活動や社会貢献活動への応用があります。そのような応用の例として、ここでは私が勤務する帝京科学大学（キャンパス所在地：東京都足立区、山梨県上野原市および山梨市）において、大学所在地近隣の「子ども」たち（主に小・中学生）を受益対象とする体験型教育プログラムの開発プロジェクトのうち、（私がプロジェクト・コーディネーターとして関わる）「自然を学ぶ体験型教育プログラム」と「社会を学ぶ体験型教育プログラム」という哲学対話を応用した二つの活動について、それぞれプログラムの大要と哲学対話の応用上のポイントを中心にご紹介したいと思います。（なお、以下に登場する「大学生」は、いずれも哲学対話を導入した大学の授業を半期（15回）以上履修した、もしくは哲学対話についての相応の事前研修を受けた大学生を意味しています。）

まず、自然を学ぶ体験型教育プログラムについては、「大学遠足に行こう——上野原キャンパスからのご招待——」（大学遠足バスツアー）というプログラム名を掲げて2015年3月8日に実施した事例に基づいてご紹介しましょう。「大学遠足に行こう」というプログラムは、足立区内全小学校の全児童へのチラシ配布とWeb上での告知・募集を経て、抽選で選ばれた約50名の足立区内の小学生が参加するプログラムです。足立区教育委員会の後援や国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成などを得て、受益者負担なし（無料）にて実施しました。

ここで言う「大学遠足」とは、小学生を主な対象として、「大学」という（小学生にとって）未知のものを身近に感じてもらうために、普段かかわることの出来ない大学の〈ひと・もの・場所〉などに、大学生と行動と対話を共にしながら触れ合う機会を提供することを目的として帝京科学大学が開発した体験型教育プログラムの名称です。足立区在住の小学生を自然豊かな上野原キャンパス（山梨県）へ“バスツアー”を組んで招待し、上野原キャンパスで生命環境学・医療科学・児童教育学などを学ぶ大学生スタッフ（約30名参加）と一緒に上野原の「春」の自然に触れつつ山や川や動植物などの自然について体験的に学ぶプログラムです。

今回のプログラム内容は、初めて会う小学生同士による半日間の集団行動（新たな関係づくり体験）、アイスブレイク&班分け（哲学対話セッション1）、山あそび（山育）、森たんけん（森育）、川あそび（川育）、動物ふれあい体験（いのちのぬくもり体験）、大学研究施設探検、地元山梨産そば粉を使用したそば打ち体験（食育、地域理解）、ふりかえり&わかちあい（哲学対話セッション2）によって構成されました。小学生を5名一組からなる10班に分け、大学生（2名）がそれぞれの班を担当しました。プログラム冒頭の班分け作業の段階では、一方では哲学対話を通して小学生たちと「ネコやイヌは好き？ へびは嫌い？」「動物は好き？ じゃあ昆虫は苦手？」「動物と植物って、同じ？ 違う？」「死ぬってどういうこと？ 生きてることと何が違うの？」といった問いと答えのやりとりを行い子どもたちの個性や性質などを把握し（哲学対話セッション1）、他方では事前の動物アレルギー調査の結果などを確認し、両者についての総合的な判断を踏まえた上で、子どもたちが安心・安全に参加できる班分け作業を行いました。

プログラムの進行主体である大学生たちに課せられた当日のミッションは、上野原の自然や動植物についてのインタープリテーション（解説）はもちろんのこと、子どもたちの気持ちや存在の受け止め、時間管理・安全管理、自然の中をウォーキングしながらの哲学的な対話活動など、（ある種の高度な）複合的なファシリテーションにありました。（筆者を含む）教員たちの仕事は、むしろプログラム策定を含む事前ミーティングや予行演習のディレクション、あるいは現場の安全管理や全体監督などに限られたものでした。

以上の自然を学ぶ体験型教育プログラムのご紹介の結びにかえて、哲学対話の応用上のポイントを整理すると次のようになります。

- ・哲学対話を導入した大学の授業を履修し対話の進行役やフォロワー役を務めることができる大学生たちが、そうした哲学対話のスキルやノウハウを自分たち自身の専門（専攻）のフィールドである自然や動植物などについてのプログラム進行に適用する試みを行っている
- ・大学生たちはプログラム進行の中で、子どもたちに向けた自然についてのインタープリテーションやウォーキングしながらの哲学的な対話活動などを複合的・相補的に組み合わせつつ、ファシリテーションの奥行きや広がり学ぶ機会を開拓している
- ・子どもたちは大学生との間で交わされる半日間の様々な対話的交流を通して、単なる知識の教授役やガイド係を超えた大人の姿に直に触れる機会を得ている

さて、社会を学ぶ体験型教育プログラムについては、「キッズシティあだち

——子どもたちが創る未来のまち——」というプログラム名を掲げて2015年3月29日に実施した事例に基づいてご紹介したいと思います。このプログラムについても、大学遠足と同様の仕組みによる告知と抽選を経て、約200名の足立区内の小学生が無料にて参加しました。

ここで言う「キッズシティあだち」とは、小学生低学年から高学年までの子どもたちが、帝京科学大学の千住キャンパスの大アリーナ（体育館）を舞台にみずから住みたくなるような仮想の「まち（シティ）」をつくり、その「まち」の住民となり、自分や友だちや他の誰かを幸せにしたり笑顔にしたりする「シゴト・仕事」を生みだし（発見し）、対価（仮想通貨）を得ることで、人と人とが支えあうしくみ（社会）と仲間と力を合わせて一つのことをやり遂げる社会性を学ぶ体験型の教育プログラムです。千住キャンパスで児童教育学・動物学・医療科学あるいは教職課程などを学ぶ大学生（約30名参加）がプログラムを進行しました。

プログラムのねらいは、わずかに半日程度（6時間）のプログラムですが、子どもたちに自由に考え自ら取り組むことの楽しさや自己肯定感を得る機会を提供することでした。同時にプログラム体験を通して、子どもたちが「こんなまちに住みたい」という思いを育むきっかけや、将来にわたり想像力やコミュニケーション力を磨くきっかけ、また「自分や誰かを幸せにするために、笑顔にするために」に取り組むという（学校教育における学習の枠に留まらない）別の学びのあり方に触れるきっかけをプレゼントすることを願い、当プログラムを編成しました。

子どもたちは、キッズシティの時間を楽しく過ごすための次の4つの約束として「①聴く（人のはなしはさいごまできこう！）、②話す（おもったことを、じぶんのことばで話そう！）、③受けいれる（友だちの考えもだいじにしよう！「ちがうよ」「ダメッ」というコトバにちゅうい！）、④考える（大学生スタッフに聞くのはさいご。まずは子どもたちだけで考えようよう！）」を全員で声に出して読み上げ、（以下に記す）午前・午後のプログラムをスタートしました。

午前中は、アイスブレイク&班分け（哲学対話セッション1）を経て、子どもたちが8～11名一組からなる約25班に分かれ、それぞれ好きなお仕事の準備（お店づくり）をしました。班分け作業の段階では、一方では哲学対話を通して子どもたちと「ひとりでやる作業が好き？ みんなでいっしょにやるのが好き？」「手を動かしてモノをつくるのが好き？ 人と話すのは苦手？」といったコミュニケーションを取りながら個性や性質などを把握し（哲学対話セッション1）、他方では保護者への事前調査の結果（兄弟姉妹は同じ班にしてほしい、障がいに配慮してほしい）などを確認し、両者についての総合的な判断を踏まえた上で、子どもたちが安心・安全に参加できる班分け作業を行いました。

次いで班ごとに「くやくしょ（区役所）、ぎんこう（銀行）、ハローワーク（仕事さがし）、ホームセンター（資材屋さん）、びょういん（病院）、びょうしつ（美容室）、ネイルアート（ネイルショップ）、にがおえや（似顔絵屋）……」など、25個ほどの仕事（職業）と店舗を作りました。なかには、「なんでも自動販売機（!）」や、「すてきや（みんなのすてきなところをさがしてあげます!）」といった仕事（お店）も作られました。なお、子どもたちが仕事（店舗・サービス）づくりに使用することができる素材としてあらかじめ現場に用意されていたものは、段ボール、紙類、各種ビニール類、また文具、工作道具に限られていました。つまり、具体的にどんなお店の装いにするか、どんなサービスをするか、どのくらいの値段を付けるかといったことは一切事前に決められておらず、これらはすべて子どもたち自身による話し合い（対話）や自由な発想の交換に委ねられました。話し合い（対話）が進まない場合は、子どもたちは大学生による「どうしてそう思うの」「他にやりかたはないかな」といった哲学対話的なサポートを受けました。

午後は、子どもたちが25の仕事（職業）の中から自分のやりたい仕事を選んで30分単位で仕事（店舗・サービス）を担当しました。30分につき「10さくら」という疑似通貨を仕事の対価として受け取ったら、今度は好きなお買い物をしたりサービスを受けたりしました。このようにして子どもたちは、サービスを提供する側と受け手とを同時に体験することで、それぞれのニーズや願いを補完し合う形で様々な職業が生まれてゆく様子や、まち（街）が少しずつ立体的に造形され機能してゆく過程を半日のプログラムを通して経験しました。プログラムの最後に20分ほど、再び小学生を8～11名一組からなる約25班に分け、大学生（1～2名）がそれぞれの班のファシリテーターを担い、ふりかえり&わかちあい（哲学対話セッション2）を行いました。

以上の社会を学ぶ体験型教育プログラムのご紹介の結びにかえて、哲学対話の応用上のポイントを整理すると次のようになります。

- ・大学生は、子どもたち同士の話し合いのサポートや子どもたちの気持ちや存在の受け止め、子どもたちのイマジネーションやコミュニケーションの促進など複数のミッションに取り組むことを通して、働きかけの方法や介入の仕方の奥行きや広がり学ぶ機会を開拓している
- ・班分け作業の過程において、子どもたち一人ひとりの「得意（苦手）な人との関わり方」「得意（苦手）な作業」に関する個別的・質的な情報などを得るために哲学対話によるコミュニケーションを活用している

以上、大学生の地域活動における哲学対話の応用や展開の事例について、とりわけプログラム内容への反映の仕方や大学生と子どもたちとの関係性の動きに光を当てながらご紹介しました。対話的な交流がもたらす喜びを、こうしたいさな活動を通して小学生や大学生をはじめ、関係するすべてのひとが感じてもらえることを願っています。

